

これが本物の潮ラーメン！～個室に通された極上の体験～(前編)

女：紗綾 男：徹也

この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

電車を降り、改札を抜ける。

都市部の夕方はまだ陽の余熱を抱いているのに、人波だけは夜の本番みたいに厚い。

制服姿の学生が目につく。肌も声も、存在そのものが発光している。

俺は彼らの軌道から外れた場所へ向かう。もう交わらないルートだ。

駅前のタクシー乗り場を横目にやり過ごし、歩き出す。

国道沿いを直進し、繁華街へ続く脇道へ折れる。

平日のせいか、この通りはまだ覚醒前の街みたいに静かだ。

低いビルの壁面はくすみ、電線は空を編みすぎた糸みたいに錯綜している。駅前の整いすぎた景色とは真逆の顔。

それでも俺は、この街が夜化粧に切り替わる瞬間が好きだった。余計な輪郭は影に溶け、看板だけが妖しく点灯し、街がようやく自分の声で喋り出す。

なのに、俺がこの時間帯にここへ来るのは、最近できた例外ルートのせいだ。いや、例外じゃない。常設になりつつある。

目的地はひとつ。

ラーメン屋

簡素なフォントの看板。暖簾は外気を遮る境界線みたいに揺れている。扉には「未成年者お断り」の札。主張は控えめなのに、意思だけは鋼線みたいに硬い。

最近知った店だ。

入り口横には自販機と灰皿。ここだけ空気の粒度が違う。街の喧騒とも、学生の無垢な光とも馴染まない濃度で満ちている。

俺はポケットの中で手を一度だけ握り、暖簾を見つめた。湯気の匂いがまだ外まで届かない距離なのに、引っ張る力だけは十分だった。

ポケットから煙草を一本。唇に挟み、オイルライターの火輪を指で転がす。紫の線が肺へ落ちる。いつも通りの儀式。今日もブレはない。

ブラックコーヒーを自販機で買う。缶の冷たさが指に残る。

一呼吸で開け、喉へ流す。苦味が舌の地図を塗り替え、歩いてきた疲労を「無効化」しにくる。

「おおー！」

扉の向こうから声が跳ねる。

今日も通常営業。そう思った瞬間、胸の緊張ゲージが勝手に落ちた。

だが、煙草とコーヒーを吸収するピッチは変わらない。

もう最適化されすぎて、疑問を挟む余地すらない。

財布を覗く。二万三千元。十分だ。

煙草を灰皿に落とし、コーヒーの痕跡を飲み切る。暖簾をくぐり、扉を開く。

湿気と匂いが真正面からぶつかってくる。ラーメン屋の空気はいつも、挨拶より先に自己紹介を済ませる。

店内は一見、普通だ。職人気質の店主がひとり。テーブルと椅子。客が四人。

だが、この店の普通は世間の物差しでは測れない。

店主と視線が合う。

「いらっしゃい！」

店主は威勢で空気を切るタイプだ。声が音というより圧で届く。

俺は軽く会釈だけ返す。ここへ来るのは六度目。覚えられている可能性を想定した動作。習慣に近い。

食券機の前に立ち、財布を開く。

初回は驚いた。ラーメン一杯の基礎価格が四千元。

この街の物価でも説明できない跳ね上がり方だったが、俺の目的は別にある。

一万円札を差し込み、八千円の「潮ラーメン」を押す。釣りは二千元。音もなく財布の奥へしまう。ここまでが前奏。

席につく。

その瞬間、視界の重心が店主の背後へ吸われた。

額縁のように並ぶパネル群。

店主の後ろには、綺麗な尻が並んでいるのだ。パネルには若い子からちょっとした熟女までの写真が並んでいる。どれもこれも美人揃いだ。

どの女も陰毛は剃ってある。

この店のメニューは、舌で味わう前に眼で完食する。

そんな錯覚すら抱かせる。

俺は食券をカウンターに置く。

店主は食券を受け取ると、短く確認し、声を放つ。

「潮ラーメン一丁！」

客たちも即座に空気を読み替える。

静から動へ。

ただの飲食店の座標から、風俗店の座標へ書き換わる瞬間。

店主は調理を開始する。

所作は丁寧で、手順は淀みなく、それなのに時間の密度が妙に濃い。

“待たせるための丁寧さ”という概念がこの世にあるなら、今まさにそれを目撃しているのかもしれない。

飲食店の常識はここでは通貨にならない。

この店の価値はスープの中じゃなく、壁面の文脈で完成している。

女性がお尻を出して、上半身は見えず、顔パネルだけの光景。

観賞だけを目的にリピートする常連もいると聞いた。

否定できない。確かに“絶景”としか呼びようがない。

そう。ここはラーメン屋の体裁をまとった風俗店。

四千円のラーメンを注文するとこの絶景を眺められる。

そして、八千円のラーメンを注文し、完食すると――

「親父、完食！氷をくれ！」

客の声が飛ぶ。

店主は無言で手順を切り替え、調理台からトングを掴む。

氷を一片だけ運び、器の中央へ置く。

スープの熱で温まった器に、氷がゆっくりと自己主張を始める。

冷たさと熱さの境界が混ざり合い、溶ける速度で結果が告げられる。

この店では、味よりも“変化の速度”が物語を作る。

「ダメかあー！」

どうやらハズレだったらしい。

客は肩をすくめ、軽く笑い、すぐ席を立つ。

「親父、ごちそうさん」

「ありがとうございました！」

店主の声はよく通る。

感情の通貨価値が高い人間だけが集まる店で、元気は最高額面。

あの声の張りだけで、この店が潤っていることくらいは分かる。

客たちは八千円でストリップを観賞し、各々のラインで満足はしているのだろう。

壁面のパネルは1から5まで。いつも同じ枚数。同じ人数。

そして、そこに映るのは揺らぎなく美しい成人女性だけ。

この店の存在を知ったのは友人の話が発端だった。

友人は二度目の来店で“当たり”を引いたと言っていた。

そして、その店主の後ろにいる上玉を一人抱けたのだ。

そこら辺の大衆スープよりずっとサービスが良く、嬢もパネル通りの上玉らしい。

しかし実際のところ、当選率は低い。

友人はその後も通い続けたが、当りは最初の一回だけ。

他は嬢の尻を眺めるだけになったようだ。

なら、その友人はここに通うのをやめたか？

いや、止めてない。まだ、通っているらしい。一回、ここの嬢の味を知ってしまったら、もう戻れないのだそうだ。

その話を反芻しているうちに、店主の声が滑り込む。

「お客さん、トッピングしますね」

展示パネルを“眺める側”の人間から“体験する側”の人間へ移る合図。

ここで拒否する客もいるらしいが、俺には理解できない選択肢だ。

流れを断ち切るには、この店の空気はあまりにも完成しすぎている。

「お願いします」

ここで拒否する客もいるらしいが、そんなの俺からしたら、興ざめもいいところだ。

「どの子にします？」

「二番」

「畏まりました！」

店主は器を手に、二番のパネルへと歩み寄る。